

ヒアシンスハウス設計会議の概要 2003.6～2004.3

参加者 太田邦夫 窪寺茂 津村泰範 三浦清史 山中知彦 永峰富一
生川朋（棟梁）
文責 永峰富一（世話人代表）

1 経過と「夢の継承事業」の位置付け

この構想が地元の建築家サイドによってたてられたのは1995年頃である。立原道造記念館を設計した江黒家成氏の助言で永峰が当時の相川浦和市長と相談したが、別所沼公園が県立公園であったため土地を借りることが難しく断念せざるを得なかった。しかし2002年に浦和市と与野市、大宮市が合併し政令指定都市になるに伴い、別所沼公園が県からさいたま市に移管され、さいたま市固有の文化形成の場として別所沼とヒアシンスハウスが改めて注目された。2002年にさいたま文芸家協会の北原立木氏、坂本哲男氏と地元の建築家山中知彦氏、永峰富一が相談し、立原道造記念館の宮本信子氏とも協議のうえ2003年再びヒアシンスハウスの建設をさいたま市に要請した。市助役の萩尾隆吉氏のご理解によって大きく進展することとなった。同年4月にはシンポジウムを開催し150名もの各地からの参加者を得て盛り上がった。その後、発起人の協力を得てより多くの賛同者による建設資金募金活動に入る一方、設計会議によってヒアシンスハウスの実施設計の検討がなされた。

2004年3月には公園占用許可、建築確認申請などの行政手続きが終了し、3月27日のヒアシンス忌に合わせて着工式が行われ立原の墓前に報告された。工事はものづくり大学客員教授を務める生川明棟梁の指導によって学生（ものづくり大学と東京大学の学生）が専門職と共同して進める。若くして逝った立原と同世代の若者の参加であり基礎工事、木工事、家具工事が主に学生によって行われる。5月に上棟を行い、9月末には工事を完了する予定である。その後準備をすすめて11.3日に開館し、当面は土日に常駐管理者をおいて一般に公開する。さいたま文芸家協会による朗読会などの催しも企画されている。ヒアシンスハウスの室内には立原がデザインした机、椅子、テーブル、ベッドと共にスケッチに描かれているランプ、本、ワインの瓶、クッション、カーテン、絨毯などを置いて、別所沼に散歩に出た立原がふらりと帰って来る雰囲気を感じられるようにしたい。

ヒアシンスハウスは現実に建設されたものではない。建築家立原道造の手による数枚のスケッチが残るのみである。当初は、この事業は「夢の復元事業」とされていた。彼が夢見た目に見えないものを目に見えるものとする事業に「復元」という言葉が当てられたのであるが、寓意的な言いまわしでもあり、多くの復元、復原事業の意義が問われる現代では誤解を生じる恐れがあるので再考されることとなった。「実現」あるいは「再現」との提案もなされた。しかし、詩人の夢は人の心に呼びかけ人の心を揺さぶるが、詩人の夢は実現、あるいは再現される

ということはない、夢は夢でありつづける、そしてその夢を人々は受け止めるのだろう、ヒア
 シンスハウスの夢は現代の人々に受け継がれているのだろう、と話し合われた。山中氏から「継
 承事業」と提案されて決定した。誰でもが夢をいだく。実現しない夢もあろう、しかしその夢
 はいつか継承されることを願って、眠りにについている。この事業は早逝した立原道造の夢を継
 承する我々がそこに自身の夢を重ねる事業でもある。

2 スケッチの検討・平面の検討（資料検討）

以下の現存するスケッチを検討する

- ア 『新建築』掲載の案 第16巻第4号（1940年4月）「立原道造追悼特集」に掲載
- イ 生田家所蔵の案 1937年12月頃作成（平面 外観パース 室内パース）
- ウ 神保家所蔵の案 『風信子』第4輯（1984年）に図版掲載（外観パース）
- エ 神保家所蔵の案 1938年2月12日神保宛書簡に同封2枚
 （仕上概要 配置 平面 外観パース 室内パース）
- オ 小場家所蔵のはがき案 1938年2月7日 LA VILLETТА DAL URAWA はがき裏面
 （平面 断面 立面 詳細）
- カ 猪野家所蔵のはがき案 1938年2月頃 LA VILLETТА DAL URAWA はがき裏面
 （平面 断面 立面 詳細）

この6資料を整理すると、ウ案とエ案は同一の内容でありひとつの案としてエ案に代表する
 ことができる。また二枚のはがきオ案、カ案の特色は窓の詳細が描かれていることであるが二
 枚の内容は同じであり、エ案とはがき案は描かれた時期が同じ1938年2月であり平面、断面も
 同じであることからはがき案はエ案に窓の詳細を補完する資料であると考えられる。したがって6
 資料をまずア案、イ案、エ案とはがき案の3案の資料に整理することができる。

新建築掲載のア案、生田家所蔵のイ案、神保家所蔵のエ案に明解な平面図が記入されている
 ので、まずその3案の平面を検討する。ア案はイ案、エ案とは玄関の位置がまったく異なり、
 イ案、エ案とは別の平面である。イ案、エ案は玄関、便所などの配置が同じであり同一平面と
 見なせる。したがって大きくア案とイ、エ案の2系統と考えられ、その2系統を検討する。ア
 案では西からアプローチして建物東端で180度向きを変えて東から入るが、イ、エ案はアプ
 ローチから建物南側中央で90度左にかわって南から入る。またア案では南側に窓があり東南の隅
 に窓が無いが、イ、エ案は東南隅に大きな窓がある。ア案ではアプローチする時に左手南窓か
 ら室内をのぞきながら進み180度方向転換をしながら便所の前が玄関であり、かつ室内に入っ
 た時にベッドを正面に室全体が視野に入ることになり、平面計画としては難があるように思え
 る。それにたいしてイ、エ案は以上の点が解決されると共に、東南の採光が確保され、かつ玄
 関が建物中央にくることによって室内がベッドの場所とテーブルの場所とに分節されている。

展開スケッチではその分節する位置に照明をおいてその効果を演出している巧みな計画であり、イ、工案はア案をさらに推敲、改良したものと結論できる。はがき案の平面はラフではあるがイ、工案と同一の案である。次に、以上のようにア案よりも平面が改良されているイ案と工案+はがき案の違いを解釈して実施設計の基本案とする。

イ案と工案では南面の窓の幅が違うことに気がつく。イ案が10尺を3に割っているのに対して工案とはがき案は2等分している。この部分の東面はどちらも10尺を2等分して幅5尺の窓幅であるからイ案ではこのコーナーの窓が東5尺幅、南6尺6寸幅と異なるのに対して、工案は東も南も5尺幅となる。はがきも寸法の記載は無いが工案と同様に読み取れる。イ案のように東と南の窓幅が違うとガラス戸のプロポーショナルをはじめ各所で齟齬が生じる。大切なこの部分ではどうしても避けたいところである。

東南開口部では開口幅の違いの他にガラス戸、雨戸の納りも違っている。窓を開いた時に、イ案の南面では1枚のガラス戸では納らず、2枚、2本のレールにせざるをえない。独立柱の外側にくることを考えるとこの窓枠は柱の外からかなり出っ張ることとなる。雨戸は東面では1本引きになっているが南面には雨戸がハッキリとは認められない。南面でも当然雨戸は2枚となるが、玄関横の壁にガラス戸2枚、雨戸2枚を引き込むことは厚くなって無理があるだろう。イ案では南の雨戸についてまだ処理されていないようである。一方工案では東面南面どちらも寸法からして壁の外に1本レールの1本引きでガラス戸が納り、全面的に開くことができる、雨戸についても1本の線と点線が描かれて1本引きであることがわかり、かつ平面には戸袋がない。これによって玄関横の壁はガラス戸1枚、雨戸1枚を納めることになり枠見込みも小さくすっきりとした納まりが可能である。

北側の窓についてガラス戸は幅12尺に4本引き違い窓で同じであるが、雨戸については異なる。イ案には普通の戸袋が描かれ、敷居が便所の壁まで延長されて全体長さは13尺5寸となっている。その長さを割り付けると4枚となるが半端でありスケッチにも迷っているような跡がある。工案の平面図では敷居は窓で止まっていて3枚の雨戸を重ねて納めており、戸袋の鏡板は描かれていない。4尺の戸袋の壁に納める雨戸は12尺の窓を3等分した方がすなおであり、ここにも推敲した案がある

はがきには雨戸を戸車で吊っているディテールが添えられている。この雨戸を外部につり込むディテールについては津村氏によって明治27年創建の擬洋風建築の名手立石清重棟梁の手による長野県松本の土蔵に使われていることが実測図面と共に報告された。立原がこの土蔵を見ているかは不明だが少なくとも立原の時代には現存したディテールであったことは確認された。また、生川氏の話では生川氏の先代が手掛けた仕事など当時の鴻ノ巣、熊谷近辺では良く使われたディテールであるという。この雨戸については通常の納まりに満足しない立原の意欲がうかがえる。それであるからこそ親しい小場氏、猪野氏へのはがきに嬉々として得意そうに書き

込んだのであろう、メカニカルな部分に興味をよせる立原の一面といえる。

また玄関の扉の開き勝手が、イ案では外開きであるが工案では内に開いている。外開きでは玄関の前が狭く苦しく無理があるが内に開くことによって、しかも左つり元にするることによって開いたときの内と外の関係も良くなり、工案は十分に改良されている。なお内開きであるからここで靴の履き替えはないものと思われ、ベッド脇にはカーペットが敷かれている。洋風な生活スタイルへの立原の思いがうかがえるが、自らの詩をソネットの形式に歌った立原の建築らしい。

< 結論 >

以上、東南窓の幅が東面、南面が同じであること、ガラス戸、雨戸に工夫がこらされすっきりと納まっていること、玄関扉の開き勝手が改良されていること、などを考慮すると工案（神保氏への案）とはがき案（小場、猪野氏への案）が推敲された最終案であると結論できる。初期には新建築掲載のア案をふくめてかなりのスケッチが描かれたであろうが1937年12月には生田家所蔵のイ案にまとめり同級の生田に相談したのであろう。そしてさらに推敲を重ねて翌年2月に“この案を地主さんに見せて下さい”と神保氏へ送られた書簡に記するまでにまとまったことと推測できる。その案に窓の詳細を添えて最も親しかった友人の木場にLA VILLETТА DAL URАWA と得意げにはがきを送ったのであろう。

展開図に描かれている照明器具もイ案ではフロアスタンドのように描かれているが工案では天井ペンダントが描かれている。これについては立原道造のデザイン志向を考慮してフロアスタンドの方が好ましいとする意見もあるが、工案が最終案であり、その結果天井ペンダントを立原が描いたものと思われ、ペンダントを採用する。小さな空間の中央にスタンドの柱が立つことはわずらわしかったのかも知れない。

また東南窓の玄関より、西端に窓台を区切る小壁がイ案では平面にあるが、工案ではそれがない。玄関扉を開いた時に窓を通して風景を見るには小壁がない方が好ましいと熟慮した結果と考えられる。この小さな室内からスタンドの柱、小壁を除くこれらの変更によって、空間の広がりや微妙な分節が考慮されている。

なお今回実現させるこのヒアシンズハウスには管理員が常駐して利用されることから便所を湯沸室に変更する。便所は近くの公衆便所を利用する。

これらの過程で、立原の開口部の取扱いが検証されたのであるが、それは同時にモダニストとしての建築家立原道造を浮かび上がらせることとなった。メカニカルなディテールをもつ東南の窓は、コーナーを切り欠く開口であり、コンクリート構造によって獲得された手法である。またどの案にも共通して描かれている北側の内観パースにはこの小さな壁面を大きく占める水平連続窓がある。当時の東大建築教室には一級下にコルビュジェに傾倒していたといわれる丹

下氏もいたし、立原自身も中世ゴシックや北欧の建築に惹かれながらも最近発見された図書館の課題設計にはコルビュジェばりの樹木を点景として描いている。立原がモダニズム様式を習得する環境は十分に整っていたし彼も書簡で機械の間に立つ美の神にふれている。この室内での生活も玄関扉で検討したように靴のままの洋風居住スタイルが考えられていた。

しかし同時に注目されることには、東南の窓もまた北側の窓も柱から芯をはずしてガラス障子を柱の外につきあわせて納めていることである。窓を開け放つとそこに柱が一本独立して立つことになる。その取扱いは、外部へ開かれた開口とそこに立つ柱によって屋外と一体的空間を構成する日本建築の伝統を思い起こさせる。そこに伝統と近代とに通底する意匠表現を求める立原を感じることができよう。以上のように、ヒアシンズハウスの開口部のスケッチには、1937年という時点で若き建築家立原道造が意欲的に木造による近代主義建築に取り組んだことがうかがえる。

それにしてもヒアシンズハウスは最小限住宅である。コルビュジェがドミノハウスを計画したのは第一次大戦後の復興住宅のためであった。また当時の東大の教室ではドイツの復興住宅が研究されていた。最近発見された立原の論文「建築衛生学と建築装飾意匠に就ての小さい感想」のなかで、《機能と快適の最も合理的な追求である所の建築計画学、それが建築学の根本であります。そしてその一つの分野である建築衛生学は、その純粋な、根元的な形に於て、建築計画学の最も重要な位置を占めてをります。》と書いている。純粋な根元的なと述べる立原らしい小論であるが、彼に潜む近代性が建築衛生学として素直に明らかにされている。立原のスケッチを子細に検討する過程で、建築衛生学を論じる立原らしくこの建築が沼の畔に建つという環境条件（地盤、湿気）をたくみに配慮していることに感心させられた（基礎の検討を参照）。またこの小論に云う《機能と快適の最も合理的な追求である所の建築計画学》をヒアシンズハウスの空間に見出すことができるが、立原の2級下で教室を共ににした建築計画学の吉武泰水氏が、亡くなる直前に立原の住宅設計図を目にした時の感動と立原への憧憬を語る姿を思い浮かべると、吉武、鈴木研究室が戦後に計画した日本の51C型住宅形式とヒアシンズハウスとを、純粋な根源的な最小限住宅の系譜の上に位置付ける誘惑にかられる。

なお開口部について三浦氏がJIA機関誌Bulletin178(2003/12)に寄稿されているのでその部分を以下に引用する。

《戦後復興期の小住宅、例えば池辺研究室の立体最小限住宅などが喚想される外観だが、平面図をよく眺めると、更にしたたかなディテールを持った建築だということに気が付く。例えば南東の角の柱とコーナー窓廻りである。

北側の腰窓と同様にこの窓のガラス戸も柱間ではなく、雨戸と共に柱の外に納まり両側の戸袋に引き込まれるようにも見える筆致で描かれている。すると、窓を開け放つと出隅に柱が一本立った能舞台か残月床のような設えとなり、庭屋一如の空間を作りだす。これは耐震補強で壁

が必要だという強迫観念によって失われつつある日本の伝統的な空間構成の一つである。一方、窓を閉めると、両側からのガラス戸が柱の外で出会い、外からは柱が隠れ、コーナーが欠けた、いかにもモダニズムの建築らしい立面が現われる。組石造を伝統に持つ西欧の建築では、開口は壁に窓を削り貫くことを意味し、従ってコーナーの壁を無くしたデザインは無謀だった。鉄筋コンクリートが発明され、建築が床、壁、柱、屋根などの各エレメントに分かれ、それぞれを独立して考えることができるようになって初めて誕生した建築言語がコーナー窓や横長窓である。その二つの言葉を駆使してヒアシンズハウスは語りかけている。慈光院の書院の雄大な眺望を例に挙げるまでもなく、日本建築の構法はこれらのボキャブラリーを内包していた。和洋の融合がこの時代の建築家たちの課題の一つだったが、立原は建具を軸組の外に追い出し、あえて隅の柱をも消すことによって、和よりも洋に重心を置いたデザインを試みようと考えていたのではないだろうか。建具を軸組の構造の芯から外す納まりは、アントニン・レーモンドが好んだ技法である。ブレイク邸が1936年、トレッドソン邸が1937年。従って建具の芯外しは、当時の建築家たちにとって周知の納まりだったに違いない。しかし、レーモンドも出隅では必ず戸当りの竪枠を設けている。建具の召し裕せについては左前を嫌っていたという岸田日出刀の薫陶を受けた立原のディテールは、出隅で建具同士を出会わせたために破綻している。だが、この平面図はエスキスである。実施設計では戸当り枠を設けたかもしれないし、あるいはガラス戸を柱間に納めたかもしれない。実際、立原道造記念館に委託展示されている模型では、コーナー窓も北側の腰窓も、引違いのガラス戸はいずれも柱間に納まり、竪羽目の戸袋を両側に設けたりファインメントが施されていた。しかし、図1のスケッチよりも少し後で作成されたと思われる神保家所蔵のスケッチ、あるいは小場晴夫や猪野謙二に宛てた葉書には、コーナーの窓は引違いではなく片引きのように見える表現で描かれて、これを出隅の納まりの推敲の結果と読み取ることもできるのである。さらに、これらの葉書には雨戸を吊り戸で納めた断面が描き添えられている。となると、戸袋が邪魔で、皿板はガラス戸を仕舞うためということになる。そのことから推して、芯外しの納まりと建具同士の出会いは立原の確信犯的なディテールとみていいのではなかろうか。(以下略)

立原と木造モダニズムについても津村氏が、「国文学解釈と鑑賞」別冊『立原道造』（2001年5月）に「続昭和伏流建築史」として書かれているので参考にしたい。

3 配置について

立原が計画した敷地は、西立面図の手前に沼が描かれていることから、沼の東岸にあったと考えられる。沼の東は鹿島台と呼ばれる台地でありそこに神保光太郎も住んでいたが、立原が借りる敷地は沼に面して台地との間にあり、平坦か緩い傾斜があったと思われる。しかし現在その一体は民有地であるため今回の敷地とすることは不可能であり公園内を借りるとなると、

原案とは沼の反対側、沼の西岸とならざるを得ない。西岸は公園として整備されているが、そこに 120 坪ほどの区画された空地があり、高い樹木も無く小さな花壇と草原になっているだけで建築しても環境を損ねることがなく適当であると判断し、市の公園課と立ち会い了解を得た。

さてそのような次第で敷地と沼の関係が 180 度反対となった条件で以下の案が検討された。

- ア 建物の東西を反転して配置する
- イ 原案どおりの方位に配置する
- ウ 90 度転回して配置する

ア案では沼からアプローチする原案にそうことはできるが、すべての窓の方位、東西南北が反対となる。南の窓は北の窓となってしまうし、コーナー窓からのビスタに現在は公衆便所がありそれも好ましくない。原案平面の裏と面をひっくり返しても問題は解決しない。

イ案ではアプローチが沼からはできない難点はあるものの窓の位置など方位との関係は原案にそうことができる。コーナー窓からのビスタは原案とは異なるが沼に向かって開け好ましい。

ウ案では片流れの勾配が沼に並行し好ましいが、かたち、窓の方位など周囲との関係は総て異なる。

ア案のように沼との関係を重視するか、イ案のように平面の方位を重視するかとなるのであるが、もし立原がこの西岸に計画したとするならば、アプローチは沼からであろうが、コーナーの窓が西北に配置されるということもあり得ず方位が平面は別なプランになったであろう。平面図と方位の関係を決定するためには、スケッチに込められた意図、ヒアシンズハウスの空間の光と影が読み取られなくてはならない。立原は設計意図の説明を残していない、幾枚かのスケッチを残し書簡で住む夢を語るのみである。ただこの空間を連想させる幾つかの詩を見出すことができる。

立原のソネットに「私のかへつて来るのは(仮題)」という作品がある。

私のかへつて来るのは いつもここだ
古ぼけた鉄製のベッドが隅にある
固い木の椅子が三つほど散らばつてゐる
天井の低い 狭くらしい ここだ

ランプよ おまへのために
私の夜は 明るい夜になる そして
湯沸しをうたはせてゐる ちひさい炭火よ
おまへのために 私の部屋は すべてが休息する

私は けふも 見知らない友を呼びながら
 歩き疲れて かへつて来た 街のなかを 私は けふも 疑つてゐた そして激しく
 渴いてゐた

窓のない 壁ばかりの部屋だが 優しいが
 すつかり容子をかへてくれた 私が歩くと
 ここでは 私の歩みのままに 光と影とすら 揺れてまざりあふのだ

この詩は立原の日本橋の屋根裏の自室をうたつたといわれているが、ここに登場するベッドも、三つの木の椅子も、ランプも、そして天上の低い狭くらしいここだ、と決して天井の高くないヒアシンスハウスをおもわせる。

この詩を手がかりに前田愛は「都市空間と文学」のなかで立原の空間を論じている。ランプよ、とよびかけ、ちひさい炭火よ、と対象を擬人化して呼ぶ姿勢に、対象の在る空間を自身の身体の延長としてとらえるその姿勢に、立原が卒論「方法論」で強調する〈住みこちの良さ〉に住むことをみいだしている。光と影すら揺れてまざりあう、と歌う詩人は意識と無意識がまざりあう中で眠りに落ちていく、と前田は指摘する。立原の〈住みこちの良さ〉には光と影が、意識と無意識が揺れている。ヒアシンスハウスの室内でも光と影が歩みのままに揺れてまざりあうのであろうか。東南の窓から差し込む光、北側からの光、夜に彼を迎えるランプの光、詩人の夢みる空間がこれらの光と影の揺れてまざりあう空間であるならば、別所沼に建つヒアシンスハウスは窓からの光と影を大切にし原案にそつた方位の案を採用することが、立原の意図〈住みこちの良さ〉に応えることになる。窓辺を歌つた「薄明」という詩もある。ヒアシンスハウスの窓に凭れかかる姿が目浮かぶようである（第2聯）。

窓をひらいて 窓にもたればいい
 土の上に影があるのを 眺めればいい
 ああ 何もかも美しい！ 私の身体の
 外に 私を囲んで暖く香よくにほふひと

以上のように一応の答を得たのであるが、さてしかし、立原にはベッドの横にある小さな窓を思わせるエッセイがある。盛岡の滞在から帰京し九州への旅の間に書いたとされる「鉛筆・ネクタイ・窓」である。

僕は、窓がひとつ欲しい。

あまり大きくてはいけない。そして外に鑑戸、内にレースのカーテンを持つてゐなくては
いけない。ガラスは美しい磨きで外の景色がすこしでも歪んではいけない。窓台は大きい方
がいいだらう。窓台の上には花などを飾る、花は何でもいい、リンドウやナデシコやアザミ
など紫の花ならばなほいい。

そしてその窓は大きな湖水に向いてひらいてゐる。湖水のほとりにほはポプラがある。お腹
の赤い白いポオトには少年少女がのつてゐた。湖の水の色は、頭の上の空の色より少し青の
強い色だ。そして雲は白いやはらかな鞠のやうな雲がながれている、その雲ははつきりした
輪郭がいくらか青に溶けこんである。

僕は室内にゐて、栗の木でつくつた凭れの高い椅子に坐つてうつらうつらと睡つてゐる。夕
ぐれが来るまで、一日、なにもしないで。

僕は、窓が欲しい。たつたひとつ。……

…… 僕が「窓のないモナド」といふことをかんがへてゐたとき、心の裂目に浮んだ夢の
やうなねがひだ。論理や思考の石だたみのあひだに雑草が芽生えるやうにこのやうなファン
シイは勢よく伸びる。僕の心は、かへつてほかの場合とおなじやうにこのやうな雑草の方に
強く惹かれる。僕がああ鐵道草の白い花を愛するやうに。

ここで立原は湖に向かってひらけた小さな窓をうたっている。このエッセイを書いた時点で
立原は既にヒアシンスハウスをつくることをあきらめているが、別所沼にひらかれている原案
のベッドの横の小さな窓がうたわれているようにも思われる。原案の方位にそつて配置すれば
小さな窓は別所沼にひらくことはできない。この立原の願いをかなえることができないことは
悲しく残念であるが、今回の敷地で窓からの光と影を大切にすればやむを得ないと結論した。

またさらに詩集をひもとくと、「午後に」という詩に出会う。別所沼がうたわれているので
あろうか。（第3聯）

たとへば沼のほとりに住む小屋であつた
ざわざわと ざわめき鳴つて すぎて行く
時のなかを朽ちてゆく ああ窓のない小屋であつた ……

なお立原の日本橋の自室についても貴重な証言があるので設計上の参考とする。また立原の
建築を論ずる時にしばしば彼の詩「石柱の歌」が参照されるが、ヒアシンスハウスの設計資料
として直接にはとりあげない。

4 断面の検討

断面図は小場氏へのはがきに描かれているだけであり、検討する上でその断面と、内観パースを手がかりとする。北側内観パースはいずれの資料にも描かれていて、それらによれば、フラットな天井が貼られている。天井寸法の記入がないためその高さをパースに描かれた机、本、ビンなどから検討する。机の高さを750（記念館の机を参考とする）、窓下枠まで150～200、とみられるので窓の位置を床から3尺と推定する。窓のガラス障子の姿がほぼ正方形かやや縦長であるので平面の寸法3尺ほどを窓Hとすると、吊られている棚板下端で床から6尺強ほどとなる。板の厚みを勘案し、棚の上にビン、本が置かれているので棚上を400とすると、天井の高さは7尺5寸程度と推定される。立原の上背が5尺7寸といわれ、むしろ低い天井であるが、立原の日本橋の自室も低い天井だったとの証言があり、彼の好み、習性にあっていたのかもしれない。東南の窓については断面図に切られていて、窓は天井まで開口され、はがきのディテールには廻縁と鴨居が兼ねるように天井いっばいに納められている。窓の下枠位置は北側窓と同じ3尺の高さであろうから、この窓Hは4尺4寸程となる。この室内で上方にとられた明るい窓である。西側の窓の位置については西立面で推定し、内観パースではほぼ机と同じ高さにあるので下端は750、Wは二尺程度、Hはやや縦長の三尺程度であろうか。立原のうたう小さな窓である。入り口ドアは、外観パースにガラス窓付きで描かれている。ドアの上部に小壁が下がっているが、北側の窓の上端が床から6尺であるからあわせてドアHを6尺とする。すでに述べたように、内側に開く勝手とする。玄関前のタタキ天井高さは東南窓の上端と同じであるから高さ7尺7寸。今回の建設ではこの建物を文化拠点として利用するために少々の収納が必要であり、建物内外にもその場所がとれないため、天井裏を収納として利用し、湯沸かし室天井に入口を設ける。

5 各部分の検討

<基礎>

立面図には布基礎のように描かれているので周囲を布基礎とする、といったんは結論づけたのであるが、詳細に図面を検討するとパースの東南隅の足下に柱のような線を認めることができる。しかも彩色された工案の東南パースを見ると、板壁と地面のあいだ、基礎部分は緑色に草のように着色され、布基礎ならば描かれているべき地面と接する水平線がなく、草むらが床下に連続しているように認められる。そこから北に追って行って便所の足下にも縦の線が見出せ、東北隅にも柱のような線があって便所の下部には布基礎が廻らずに床下が開放されているようだ。汲み取りであるためだろう。またはがきの立面図、断面図では布基礎は無く、ハッキリと柱によって床が支持されている。すでに検討されたように、東南面のように隅を開口部とした立面は伝統建築と近代建築に通底する手法による軽快な表現であった。思いを込めて描い

た東南アングルのここで、その軽さを強調するように、床を束柱で浮かす手法がとられているといえよう。一方同じ工案の西立面図では板壁の下に水平に着色された布基礎のような部分が認められる。はじめはこの部分を布基礎であるとして全体が布基礎であると考えたのだが、東南面が束基礎であることが判明したのでこの部分を改めて拡大して見ると、この着色に使われた色彩も筆のタッチも屋根の影を描いている筆使いと同一であった。つまりこの部分は床下の影が描かれているとも考えられる。さらに、はがきの断面図にはこの部分もハッキリと束柱が床を支えていることが描かれている。以上のように、注意深くスケッチを見ると、床下の空間は吹き放たれて建物は束柱で支えられている、と結論した。昭和初期の木造では束基礎が一般的であり布基礎は一部の建物に使用されていたという太田氏の意見もある。立原はこのヒアシンスハウスを布基礎で地面にしっかりと固定するよりも、草むらの上に束柱で軽く浮かせておきたかったのではと推察される。

このヒアシンスハウスが一般公開されることを考えると、現実的には束だけでは不安であり不同沈下を防ぐために、平面の中央部分に布基礎を設置して地盤に安定させ、その基礎から土台を 2 尺ほど片持ちで柱根がらみを柱下周囲に廻して、架構を支持し安定させる。スケッチにある束の位置には、柱を自然石の独立基礎の上に建てる。

< 木軸組 >

床は通常の大引根太組みとする。柱は 3.5 寸、柱上部に地回り桁を四周に廻し、小屋組を支える。屋根は勾配にそって 5 尺間に母屋をかけ、垂木をわたす。パースを見ると破風の見附は薄く垂木は隠されていて軒天が張られている。屋根を薄くするために垂木は 7 5 * 4 5 材を一尺間に掛ける。母屋材は 8 尺間に掛けるので 8 寸程になるため軒の部分の材寸を落として立面を整える。

< 屋根 >

仕上げに、垂鉛引鉄板 ナマコ板、と書かれているので、下地板の上に防水シートを施し垂鉛引鉄板ナマコ板を貼る。ナマコ板屋根の四周は雨仕舞のために板金でかぶせ、面戸ですきまをふさぐ。下部は開放して入った水を流す。四周板金のディテールは影をつくるなど検討する。

便所的小屋根の掛けかたであるが、模型を製作した佐藤氏の意見を参考にしながらスタディ模型を 4 案つくり検討した。東南からのパースにはこの小屋根の下に垂鉛鉄板ナマコ板の小壁が描かれている。東面壁と屋根の取り合いは防水が配慮されなければならないが、この部分に対する雨水量を最も小さくするために、この取り合い部分を水上として主屋根の勾配と同じく西への片流れと決定する。従ってスケッチのようにこの屋根にひさしはない。ペンキ塗り、と記入されている塗装については、オイルペンキでは耐候性が落ちるので鉄板その他金物はメッキの上フッ素樹脂塗装とする。

< 外壁 >

仕上げに、杉板荒削りのまま 豎羽目貼 ステイン仕上げ、と書かれているので、横胴縁の上に合決り継ぎ目透かし張りとする。板幅はスケッチから推定して5寸程度とする。

上部の小壁がナマコ板貼となっているので防水を配慮し、下地板の上に防水シートを施し、その上にナマコ板を貼る。出隅は木の役物を入れて納める。

< 開口部 >

東南の窓に議論が集中した。スケッチではガラス戸が隅の柱の外側に描かれ、ガラス戸の突き合わせで納められている。すでに立原のモダニストとしての側面には触れたが、それはこのディテールに明らかである。東南の隅を切り欠き、柱を見せないで開口部をガラス戸のみの表現とする。今でも良く使われる表現である。東南の窓は、イ案（生田案）と工案（神保案）の相違を論じた際にも指摘されたが、工案最終案では10尺のなかで窓と壁が2等分されガラス戸が壁に引き込まれることになる。しかしスケッチを見てもガラス戸は引き違いのように小さな線が記入されている。5尺を2本に割った2枚の戸だとすればレールは2本となり、柱に外付けの窓枠としては見込みが大きすぎるうえ、わざわざ2等分して5尺の窓を引き込むように改良したと矛盾する。この窓は前述したように立原の近代性を表出する窓であり、全面的に外部に開放されることが意図され、その狙いで割り付けも考えられている、とするならば、建具は幅5尺の1本として1本のレール上を動かせた方が見込み寸も小さく、納まりも良いと結論することになった。隅の柱は独立して立つ。

北側の窓も真中に立つ独立柱の外側に4枚の引き違いガラス戸を立て込んだ水平連続窓である。4本の引き違いであることはハッキリしているので引き違いの召し合わせが検討され、イ案と工案では召し合わせが異なり、中の2枚が外か内かと議論された。立原の師である岸田日出刀先生が左手前を教えていたことなども話題とされながら、独立柱と連窓を表現するためには柱とガラス戸を離した方が良いとなり、中の2枚を外側とすることになった。ガラス戸の敷居は枠より落とし込んで納める。

次にガラス戸の姿が検討された。棧の割り付けがイ案では中棧2本で3等分しているのに対し、工案では中棧1本で2つに割っている。どちらが立原の好みなのか判断の難しいところであるが、スケッチされた時期の遅い工案を採用する。この棧割で東南窓も北窓も統一する。

ガラスの質について、並ガラスと記入され、いわゆる今云うところのレトロガラスであろうと考えられるが、先に引用した窓をうたった詩のなかで、ガラスは美しい磨きで外の景色が少しも歪んではいけない、とあるので立原の願いに応じて磨きガラスとすることも考えられる。建具金物は当時のモノに似ているモノをさがす考えもあるが、地元川口の鋳物を活用することも考えられる。なお鋳物は金物に限らず外構などにも利用でき、地元の技術を使うことは、今ヒアシンズハウスを別所沼に建てる意義にもつながる。

東南の 1 本引き雨戸が車によって吊られているディテールがあること、そこにメカニックへの嗜好を持つ立原の面目が窺われることは既にふれた。またそのディテールが松本の土蔵に見られ、また生川棟梁の話のように当時熊谷地方で一般的であったことも報告された。したがってこのディテールを採用することでは一致したが、雨がかりの戸車を露出して使用することに問題がないのか、カバーが必要ではないか、ということが議論され保留されている。このディテールの雨戸下部のふれ止めについては雨戸に付ける金物によって枠からはなれないようにする。この雨戸が納まる壁の部分の造作についても保留されている。

北側の雨戸については、必ずしもガラス戸の割りにあわることもないので（例は多くある）12 尺を割って 3 本の雨戸とし 4 尺の壁の部分に納める。3 枚の雨戸を戸車で吊って納めることは難しいので、またここの詳細スケッチもないので通常の敷居納まりとするが、戸袋も描かれていないので戸袋鏡板はない。

西壁のベッド脇の小窓はスケッチを参考に少し縦長のプロポーションとして W 二尺、H 三尺におさまるほどであろうか。

<室内各部分>

床、壁は仕上げ表に、杉縁甲板貼、と記入されているのでそれによる。その板幅については意匠上大きな問題であるが、各案のうち板目地が描かれている室内パースはイ案のみであり、それを推量すると幅 5 寸ほどである。一方、立原の秋元邸のスケッチ（風信子 6、7 合併号掲載）には杉板幅 3 寸 5 分と記入されている。ここでは室内パースのイメージを尊重し、かつ外部の板幅 5 寸にあわせて内部の板幅も 5 寸とする。

窓枠など造作材の見つけ寸法については、当時のレーモンドなど木造建築に使われている 1 寸 5 分から 1 寸 4 分と考えられるが、工案の仕上げに天井押縁 1 寸 5 分の記入がある。天井押縁としては大きめであろうが、ヒアシンズハウスの平面寸法が 4 尺を基準としていることを考えると立原の部材の感覚が少し大振りであったとも推測される。立原の 2 冊の詩集も詩集としては例になく大判であった。詩集の各ページは立原自身で構想されているが、枠を廻して詩を囲みカッチリした装丁である。これらのことも踏まえて杉板巾および造作部材の寸法は検討される必要がある。

天井は テッキス貼 押縁杉角材（1.5*1.5）ステイン仕上、と記入されている。テッキスとはどこかで聞いた用語であるが、三浦氏が調べたところ、アメリカ屋によって 4 尺*8 尺のボードが輸入され使用されていたようである。現在では入手不能なので、プラスターボードで代用しペンキ塗として、ボード寸法から推して 8 尺間に押縁をながす。

天井廻縁はイ案の室内パースに描かれているが、工案では廻縁は描かれていないが壁板の目地割もないので、工案は仕上げの納まりを意識したスケッチではないものと考えられる。しかし工案と共通すると思われるオ、カそれぞれのしがきの窓廻りの詳細からは廻縁があるよう

な描き方がある。したがってイ案を採用して天井押縁と同寸材の廻縁を施す。

<仕上げの色彩>

外部の色彩についての手掛かりは

外壁杉板 <荒削りのマステイン仕上げ>と指示があるので茶系のステイン色

屋根と小壁生子板 <緑灰色ペンキ仕上げ>とあるので立原の好きな緑灰色

建て具 <硝子戸は枠は緑灰色ペンキ塗り> <雨戸は外壁に同じ>

以上が立原の指示であり、それから類推すると破風、母屋、窓枠、など木部はステイン色で外部全体は茶系色でまとまり、そのなかに屋根面と硝子戸の格子枠が緑灰色で浮き上がるようである。屋根や窓周りの板金の色はその周りの茶系か緑灰色にあわせるようであろう。軒天の色は白系統という意見が出されているが今後検討されよう。

内部の色彩についての手掛かりは

<天井押縁ステイン仕上げ>

<造附家具 杉材を用いて木地のまま>

とあるだけであるが窓枠、天井周縁、など木部の造作材は押縁にあわせてステイン色の茶系で内外あわせればまとまる。床は履き替えがなく靴で上がるとすれば掃除の上からオイルで拭くことが考えられ茶系となる。木部の床と造作枠がこのようにステインの茶系になり、外壁杉板が茶系であり内壁杉板を他の色に着色する理由もなければ、内壁板はステインの茶系が素直であろう。ただ棚、机、ベッドなどの造り付け家具は木地のままであるのでステインの茶系色のなかで浮き立って見えることとなる。さて、天井は何色であろう。仕上げ材はテックスと記されたボードであるからペンキ色が考えられ、ペンキ色ですでに使われている色は立原の好きな緑灰色と軒天の色として提案されている白である。緑灰色か白かさらに議論を重ねたい。

6 家具

作り付け家具はスケッチを参考にして机、ベッド、棚を木製でつくる。北側ベンチはスケッチには描かれていないがこの施設の用途を考え、座板を跳ね上げて中を収納とする。作り付け家具の塗装はスケッチに<木地のまま>と指定されているのでクリヤー仕上げとする。置家具の机は工案に2種類のスケッチがあり、記念館の立原自身の机を参考にする。椅子もスケッチにこしかけA,こしかけBの2種類が描かれているので2種類を造る。

7 電気設備

この建物が公園内展示施設として利用されることを考慮して計画する。

引き込みは公園内電柱から埋設で引き込みメーターで積算可能とする。

照明はスケッチの位置に100W程度のスイッチ付きの白熱球(当時の器具がのぞましい)とし、

夜間の利用は少ないのでそれで充分とする。

コンセントは室内に3~4ヶ、室外に2ヶ程度、湯沸かし室にポット用として1ヶ、またインターネット端子を設ける。

閉館時のために電話回線によって警備会社に接続する監視設備を設ける。

8 給排水換気設備

給水引き込みは公園前面通路から引き込む。衛生器具としては湯沸かし室に流し台を設置する。料金については使用量が少ないので定額とするか、メーターで積算するか、市と協議する排水は雨水と少量の雑排水なので浸透方式とする。屋根雨水はスケッチにあるように樋から瓶で受けオーバー分を周囲に浸透させ、小屋根の雨は流し放し。湯沸かし室には換気扇を設ける。

9 外構

建物西北に描かれているパースの樹木は工案平面図にポプラと書き込みがあるのでポプラを植える。玄関へのステップ前方にアイストップのような立方体の書き込みがあるがコンクリート製であろうか。太田先生の話では生田さんが設計した<亀甲の家>にも同じデザインがあるとのことで参考にして今後検討する。

以上